



長沼城址に佇む文学碑。そこに刻まれたのは、まちが舞台となった文学の一節。その面影をそのままに、未来へと語り継ぎたいと私たちは思います。



長沼焼で培われた工芸の心は、脈々と受け継がれています。従来の伝統にとられない、独自の手法による焼き物が、今もつくられています。



21世紀に求められる教育をめざし、子供たちへのコンピュータ指導が行われています。教育も、文化も、新しい形へと進化をめざしています。



学ぶ心や楽しむ心は、いつまでも大切に。それは町民一人ひとりの願いです。いくつになっても、好きなことに夢中——。そんな素敵な笑顔がはずみます。



つくる。魅せる。楽しむ。思い思いのテーマが集まって、まちの“現在”を豊かに表現。そんなステージから、まちの未来への活力が生まれ出されます。

たづくりによって変わったという。「自由な発想で、自由なやり方でできる。誰でも踊れる」——そんな雰囲気、参加しやすい素地をつくった。

自分自身が楽しみたいからやっている。義務感で、頼まれてやっているのではない。いつでも自分が主役。だから、ハネトも観衆も心から楽しんでいるのが、肌で伝わってくる。「やって良かったな」「来年はこうしよう」そんな想いが胸に込みあげ、祭りの情景は、一年中、頭に浮かんでくるという。

つくるのもやるのも同じ人間だから、じつさい大変だ。しかし「もっと魅せたい」「もっと目立ちたい」という気持ちは、どんどんふくらんでいる。まわりの協力も、自然に広がってきた。この祭りの楽しさをもっと町内の人たちとわかち合いたい。そんな熱い想いは、確かに広がっている。そのためには今後、参加団体の核となる若い人を育てることが大切だ。そして町内全域での参加を、メンバーは夢見ている。それは長沼の人を育て、長沼ならではの自由な文化を育てていくことだろう。



祭りが続けられるか、わからない時期もありました。でも「祭りがやりたくてしかたがない」みんな、そんな気持ちでいっぱいでした。その時初めて、祭りの準備をするのは消極的だった人たちからも「自分たちも力になりたい」という気持ちが生まれて、本当の意味で町が一つになった気がするんです。